〈指示副詞＋係助詞〉の諸形式について

柴田　敏

1

カク・サ・シカシカといった古代語の指示副詞には、下のｎ１の例のような「会話の内容を具体的に紹介しない省略表現」（以下では「会話省略表現」と呼ぶ）に用いられる場合がある。

ｎ１かく籠り居給へらむとは思しもかけず、人々も、又御心まどはさじとて、カクナムとも申さぬなるべし、昼のおましにいざり出でておはします（源氏・賢木 350-11）(注1)

この会話省略表現については、「ナムが下接した例の比率が、ゾ・コソの例に比べて高い」という分布上の特色が、係助詞ナムについての研究の中で指摘されてきた。たとえば森野崇（1987）では、該当する用例を「会話の内容を具体的に述べずに、「かく」や「さ」を使った一種の省略表現をとる」用法と概括し、この用法には「「かくなむ」「さなむ」の例が目立つ」一方で、「「かくぞ」「かくこそ」という形式が殆ど使用されない」という点を指摘している。しかし指示詞、指示副詞をめぐる研究の中では、古典語の〈指示副詞＋係助詞〉という単位に注意が払われることはなかった。

一方で、現代語の指示詞について田窪行則・金水敏（2000）が談話管理理論によって説明しているソ系列・ア系列の用法の違いにあたるものは、古典語についてはいまだ明らかでない。岡崎友子（1999）がまとめているように、「上代から中古にかけて「カク（カウ）」は現代のコ・ソ・ア３系列で指示する近称・中称・遠称すべての領域を指示していた（一部サ系）」のであれば、そもそも指示詞および指示副詞だけを対象としているかぎりは、現代語におけるような使い分けを明らかにすることは困難であると考えざるをえない。

そのような中にあって、〈指示副詞＋係助詞〉という単位で観察することによって、上記のような分布上の違いが指摘できるということに着目したい。源氏物語から得られた用例をもとに、考察を進めてゆくことにする。(注2)

2

はじめに、指示副詞を用いた会話省略表現について、どのようなものが会話省略表現

に該当するのかを整理しておきたい。

まず、会話省略表現は、文脈指示、現場指示の用法とは区別される、指示副詞の一用法であると考える。その会話省略表現は、「会話の内容を具体的に紹介しない」だけで、文体的には会話文と同等と考えられる。つまり、会話省略表現に該当する指示副詞の現れる文は、会話文に相当する。

そうであるとすると、会話省略表現に該当する指示副詞の例が現れるところには、会話の行われる「場面」が存在しなければならない。当該指示副詞が現れる文脈には、話し手と聞き手がいて会話がなされる「場面」が存在するか、あるいはその「場面」が仮想的に設定されているか、どちらかでなければならない。

会話省略表現は、現場指示、文脈指示とは区別される用法であるから、その「場面」において、下記のいずれかの内に指示副詞の指示対象が存在するものは、会話省略表現ではない。

・会話省略表現の話し手自身を含む、会話の参加者の発話
・会話の行われている現場

このようにして、会話省略表現に該当する指示副詞の範囲を、ほぼ定めることが出来る。〈指示副詞＋ナム〉の例を使って示せば、先のｎ１と次のｎ２は会話省略表現に該当するが、ｎ３は文脈指示、ｎ４は現場指示の例である。

ｎ２…かの尼上、いたう弱り給ひにたれば、何事もおぼえずとなむ申して侍りしと聞こゆれば、あはれの事や、とぶらふべかりけるを、などかサナムとものせざりし、入りて消息せよと宣へば、人入れて案内せさす（若紫 177-7）
ｎ３例の随身召して、御手づから人間に召し寄せたり、道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ、サナム侍ると申す（浮舟 1910-10）
ｎ４人聞かぬ時は明け暮れカクナムあそばせど、下人にても都の方より参り立ち交じる人侍る時は、音もせさせ給はず（橋姫 1522-3）

ｎ１は、省略された会話が地の文中に引用されている例である。このような例は、物語の読者(注3)を意識した表現である。会話省略表現の話し手は、聞き手に対して、現実に「こうこうです」といった省略した表現をする、あるいはしたわけではない。それは、物語の読者にとってはすでに明らかな内容を、もう一度こと細かに語ることを避けたものである。この例でいえば、「カクナム」の具体的な内容として「光源氏様が塗籠においでです」というようなことを、読者は文脈から補いながら読んでいるのである。

ｎ２の例では、省略された会話が、当該場面で進行中の会話文中に引用されている。光源氏を話し手とする会話の中で、光源氏は、惟光が自分への報告を怠ったことを叱りつけて、「などか「サナム」とものせざりし」と言っている。引用符に入れて示したよ

うに、「サナム」は惟光がするべきであった報告、つまり惟光を話し手とする会話を、光源氏が省略して引用したものである。なぜ省略されたかといえば、わざわざ文言を忠実に言わなくても、その内容はこの二人にとっても、そして物語の読者にとっても明白だからである。

ここで、これらの会話省略表現がなされる「場面」において、そこで伝達される情報には、ある大きな特徴があることが観察される。それは、会話省略表現で伝達されている情報は、会話省略表現の話し手にとっては会話以前から知っていることであり、聞き手にとっては、その会話によってはじめて知らされる情報であるということである。

たとえばｎ２の例では、惟光は上に述べたとおり、「サナム」で指示されている情報を光源氏に報告しなかったのである。その「今は故按察使大納言邸にいる若紫祖母の尼君が、ひどく体調を崩している」という情報を、惟光は以前その家を訪ねて知っていた。その時点でそれは惟光だけが知っている情報で、光源氏は知らなかった。光源氏は後になって、惟光がその時報告しなかったその情報を知り、惟光を叱責しているわけである。惟光がもし「サナム」と報告していたら、それによって光源氏は、その時点でその情報を得ることができたのに、その報告がなかったことを怒っているわけである。

ｎ１においても、「カクナム」で指されている「光源氏様が塗籠においでだ」という情報は、女房のいく人かは知っていた。にもかかわらず、それを知らない藤壷中宮に対して、彼女たちが情報を伝えなかったということがいわれているのである。

どちらの例においても、会話省略表現の話し手にとって、会話省略表現が伝達している情報は、その時点で行われている会話の中で得られた情報ではない。それ以前から知っていた情報である。

田窪・金水（2000）では、談話領域を直示的な指示に関わる直接経験領域（D-領域）と、記述的指示に関わる間接経験領域（I-領域）とに分離し、それぞれの領域の性質は、次のように要約できるとする。(263ページ)

D-領域　（長期記憶とリンクされる）
：長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。
：直示的指示が可能。

I-領域　（一時的作業領域とリンクされる）
：まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。
：記述などにより間接的に指示される

この用語によって述べれば、会話省略表現において言及されている情報は、その話し手にとって「あのこと」という直示的指示が可能なD-領域の情報であるということになるだろう。(注4)

3-1

会話省略表現で伝達される情報が、話し手にとってD-領域の情報であるということについて、まず〈指示副詞＋ナム〉の例を取り上げて見ておきたい。

指示副詞にナムが下接した〈指示副詞＋ナム〉の例は、源氏物語には、カク・ナムが40例、サ・ナムが23例、シカ・ナムが6例、シカシカ・ナムが6例の計75例である。その内、会話省略表現に用いられたものは、カク・ナム29例、サ・ナム15例、シカ・ナム4例、シカシカ・ナム6例の計54例であり、〈指示副詞＋ナム〉の例の7割以上を占める。

それらの会話省略表現の例において、具体的に紹介することを省略された会話の内容を、小論の判断によって構成し、そこで伝達された、あるいは伝達されなかった、また伝達されようとした情報を補うこととする。すると、そのようにして得られた情報は、〈報告〉、〈伝言取次〉、〈打明〉の三種に類別される。

〈報告〉に類別されるのは、次の例のように、ある情報を持っている人物が、それを知らない人物、場合によっては神仏に対して、報告する例である。先のｎ１、ｎ２も〈報告〉の例である。次の例は心理描写中に現れたものだが、これも会話省略表現の〈報告〉に該当すると考えられる。

ｎ５…とややくづし出でて、問はず語りもしつべきがむつかしければ、よしよし、まづカクナム聞こえさせんとて参りぬ（蓬生 535-3）(注5)

〈伝言取次〉の例では、話し手は、第三者の話した言葉を聞き、それをそのとおりに口伝えに聞き手に伝えている。

ｎ６わざと奉れさせ給へるしるしに、何ごとをかは聞こえさせんとすらむ、ただひとことを宣はせよかしなど言へば、げになど言ひて、カクナムとうつし語れども、ものも宣はねば、かひなくて…（夢浮橋 2070-5）

ここに見える「カクナム」は、妹尼が小君の言葉をそのまま浮舟に取り次いだことを表している。

〈打明〉の例では、話し手の胸中にある思いや考えなどが、聞き手に打ち明けられている。「話し手の思い・考え」が情報として聞き手に伝達される例である。

ｎ７…紀伊守驚きて、遣水の面目とかしこまり喜ぶ、小君には、昼より、カクナン思ひよれると宣ひ契れり（帚木 76-9）

以上、会話省略表現に用いられた〈指示副詞＋ナム〉の例を見た。〈報告〉、〈伝言

取次〉、〈打明〉のいずれのグループの例においても、そこで伝達されているのは話し手にとって直示可能なD-領域の情報であり、聞き手にとってははじめて聞く情報である。

3-2

同様のことは、〈指示副詞＋コソ〉の例についても確認できる。それについて、実例を見ることにする。

〈指示副詞＋コソ〉の例は、カウ・コソ4例、カク・コソ12例、サ・コソ39例、シカ・コソ1例、シカシカ・コソ2例、計58例である。その中で、会話省略表現に該当するものは、7例である。

k 1…ここにかく渡り給ふのみなむ、目もあやにおぼろけならぬことと人申すなど語りけるを、サコソ言ひつれなど、人々の中にて語るを聞き給ふに、いとど胸ふたがりて…（総角 1648-7）

k 2常に、サコソあらめと宣ひけることとて、今日やがておさめたてまつるとて、御甥の大和の守にてありけるぞ、よろづにあつかひ聞こえける（夕霧 1340-3）

k 1は、薫の供人と良い仲になった宇治の若い女房が、その恋人から聞いた匂宮や薫に関する話を仲間に吹聴しているもので、〈報告〉の例である。k 2は落葉宮の母御息所が常々、自分の臨終後はすぐに埋葬してほしいと遺言していたということを紹介するもので、〈打明〉の例である。

k 3…女君には、ことにあらはしておさおさきこえ給はぬを、聞きあはせ給ふこともこそと思して、サコソあなれ、あやしうねじけたるわざなりや、さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひのほかに口惜しくなん…（澪標 491-11）

この例も〈報告〉にあたるが、「サコソあなれ」と、結びに終止ナリが現れている。それによって、話し手の光源氏にとってもその情報が不確実なものであることが示されている。あるいはそれは一種の婉曲表現かもしれないが、いずれにしても、明石で姫が生まれたことを事前に光源氏は聞いているのであり、それはこの場面の光源氏にとってD-領域の情報だということになる。

これら以外の〈指示副詞＋コソ〉の例においても、会話省略表現において伝達されているのは話し手にとってD-領域の情報なのである。

3-3

これらの〈指示副詞＋ナム〉、〈指示副詞＋コソ〉に対して、〈指示副詞＋ゾ〉に関してはいささか異なった状況が認められる。〈指示副詞＋ゾ〉の例は、カウ・ゾ2例、カク・ゾ5例、サ・ゾ9例がある。その中で、会話省略表現に近いと思われるのは次の1

例のみである。(注6)

z 1 四位になしてんと思し、世人もサゾあらんと思へるを…（少女 667-11）

この例は「世人」という非特定的な複数人物の心理を描写しているもので、会話の「場面」も設定されていない。会話省略表現に該当するとはいいにくい。そして、「サゾあらん」というのは、世人の推測が「父・光源氏は夕霧を四位にするだろう」というものだったということを意味しているが、推量の助動詞ムが用いられていて、これは話し手（世人）にとってD-領域の情報ではない。

3-4

以上、会話省略表現に用いられた〈指示副詞＋係助詞〉の例について見たが、その中で次の3点が明らかになったことは重要である。(注7)

・会話省略表現において伝達されているのは、話し手にとって以前から知っている、D-領域の情報である。
・〈指示副詞＋ナム〉および〈指示副詞＋コソ〉には会話省略表現の例があり、特に前者には多い。
・〈指示副詞＋ゾ〉には会話省略表現の例がなく、それに近いと思われる例についても、そこで伝達される情報は話し手にとってD-領域の情報ではない。

4-1

上記の検討結果を踏まえて、以降は会話省略表現以外の用法について、まずは現場指示の例から見ることにする。

現場指示の例においては、指示副詞の指示対象は会話の場面に存在する事物であり、話し手にとって直示可能であるということになる。その点では、〈指示副詞＋ナム〉〈指示副詞＋コソ〉〈指示副詞＋ゾ〉のいずれもかわりがないはずである。しかし、先の会話省略表現についての検討では、指示詞の指示対象ではなく、会話文に相当する会話省略表現において「言語表現化を省略された情報」を検討対象としていた。現場指示の例についても、〈指示副詞＋係助詞〉が現れる文あるいは節が伝達している情報について検討することとする。

4-2

〈指示副詞＋ナム〉の現場指示の例は、カク・ナムに集中して10例見られる。

n 4 人聞かぬ時は明け暮れカクナムあそばせど、下人にても都の方より参り立ち交じる人侍る時は、音もせさせ給はず（橋姫 1522-3）

この例は先に示したものだが、「人聞かぬ時は明け暮れカクナムあそばせど」という〈指示副詞＋係助詞〉が現れる節において伝達されている情報は、明らかに宇治八宮邸の宿直人にとってD-領域の情報なのである。

n 8 殿も渡り給へるほどにて、カクナムと女別当御覽ぜさす、ただ御櫛の箱の片つ方を見給ふに、つきせず細かになまめきてめづらしきさまなり（絵合 557-10）

この例では、朱雀院から送られた前斎宮入内のお祝いの品々を、女別当が光源氏に披露している。「カクナム」の言語的な情報量は極めて少ないが、贈り物の披露であるのだから、披露しているがわの女別当にとってD-領域の情報であることは間違いない。

n 9 そむき給ひにし上の御心むけも、ただカクナン御心へだて聞こえ給はず、まだいはけなき御ありさまをも、はぐくみ奉らせ給ふべくぞ侍めりし、うちうちにもさなむ頼み聞こえさせ給ひしなど聞こゆ（若菜上 1078-10）

出家した朱雀院の意中を紫の上に伝える中納言の乳母の言葉だが、カクは紫の上と女三の宮が対面している現場そのものを指している。そして、朱雀院は、紫の上が女三の宮のことをこのように隔てなく思ってくれることを望んでいらっしゃいましたと、話し手（＝中納言の乳母）が知っているD-領域の情報を伝えているのである。(注8)

このように、〈指示副詞＋ナム〉の現場指示の例で、その文あるいは節が伝達しているのは、話し手にとってD-領域の情報である。

4-3

〈指示副詞＋コソ〉の現場指示の例は、会話中に4例、心理描写中に7例現れる。会話中の例はすべてカク・コソ、心理描写中の例はカク・コソ6例にサ・コソ1例である。

k 4 …入り給ひて、女君に花見せ奉り給ふ、花といはば、カクコソ匂はまほしけれな、桜にうつしては、又ちりばかりも心分くるかたなくやあらましなど宣ふ（若菜上 1064-9）

k 5 カクコソは、すぐれたる人の山口はしるかりけれと、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づきにほひたるを、いみじうらうたしと思す（松風 588-13）

k 4の例では、「花といはば、カクコソ匂はまほしけれな」は話し手にとってD-領域の情報と見てよいだろう。k 5は明石姫君を初めて見ての光源氏の感慨だが、これは光源氏にとってD-領域の情報とは見なしにくい。

〈指示副詞＋コソ〉の現場指示の例では、その文あるいは節が伝達しているのが話し

手にとってD-領域の情報であるとはかぎらない。

4-4

〈指示副詞＋ゾ〉の現場指示の例で、会話中に現れるものは次の3例である。

z 2 後夜の御加持に、御物の怪出で来て、カウゾあるよ、いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ、日ごろ候ひつる、今は帰りなむとてうち笑ふ（柏木 1242-2）

z 3 かの見つるさきざきの桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、カクゾあるかしと思ひよそへらる（野分 878-13）

z 4 女一の宮も、カクゾおはしますべかめる、いかならむ折りに、かばかりにてももの近く御声をだに聞き奉らむと、あはれとおぼゆ（総角 1626-6）

z 2は加持の最中に現れた物の怪の言葉だが、「カウゾあるよ」が自身の姿を指して「これこのとおりだ」と言っているのであれば現場指示の用法となる。D-領域の情報を伝達しているようにも見えるが、そうだと断定はできない。

z 3は、夕霧が明石姫君の姿を垣間見て、藤の花の美しさになぞらえている例、z 4は薫がこれも明石中宮のもとを訪れ、その美しさから女一宮の容姿を推測している例である。これらはどちらも現実に目にした美しさに触発されたその場での連想である。「カクゾあるかし」「女一の宮も、カクゾおはしますべかめる」はともに、D-領域の情報を伝えているものとは見なせない。

〈指示副詞＋ゾ〉の現場指示の例では、その文あるいは節が伝達しているのが話し手にとってD-領域の情報であることが確実だと断定される例はなく、一方D-領域の情報でないことが確実な例は存在する。

5-1

次には、文脈指示の例について見る。

〈指示副詞＋ナム〉の文脈指示の例は、カク・ナム1例、サ・ナム8例、シカ・ナム2例の、計11例ある。すべて会話中の例である。それらは、指示副詞の指示対象が、話し手自らの発言内にあるもの（6例）と、会話の相手の発言内にあるもの（5例）とに分けられる。次のn 10が前者、n 11が後者の例となる。

n 10我、女ならば、同じはらからなりとも、かならず睦びよりなまし、若かりし時など、サナンおぼえし、まして女のあざむかれんは、いとことわりぞやと宣はせて…（若菜上 1033-8）

n 11さて、をかしきことは、院のみづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだ

あだしき御心遣ひをば、大事と思いて戒め申し給ふ、後言にも聞こえ給ふめるこそ、さかしだつ人の、おのが上知らぬやうにおぼえ侍れと宣へば、サナム、常にこの道をしも戒め仰せらるる、さるは、かしこき御教へならでも、いとよくおさめて侍る心をとて、げにをかしと思ひ給へり（夕霧 1362-11）

この2例を見ると、どちらの例でも、〈指示副詞＋ナム〉が現れる文が伝達しているのは、話し手にとってD-領域の情報である。n 10の「若かりし時など、サナンおぼえし」というのは、話し手（朱雀院）の若い頃の心情を言っているのであり、当然話し手の直接的知識であり、D-領域の情報である。n 11は夕霧と花散里の会話の中で、花散里が、光源氏が夕霧に対しては、男女の道についていつも厳格な訓戒をなさるようだという話題を出した。それを夕霧が受けるところで「サナム」が現れている。夕霧は、光源氏に訓戒されている当事者なのであるから、「サナム、常にこの道をしも戒め仰せらるる」というのは、話し手にとってD-領域の情報だということができるのである。

このように、〈指示副詞＋ナム〉の文脈指示の例では、指示副詞の指示対象が話し手自らの発言内にあっても、会話の相手の発言内にあっても、〈指示副詞＋ナム〉が現れる文が伝達しているのは、話し手にとってD-領域の情報なのである。

この点に関して、会話の相手の発言内に指示対象がある例については、さらに2例を取り上げて検討しておきたい。

n 12…大臣の君に、かくなむ進み宣ふを、今は限りのさまならば、片時のほどにても、その助けあるべきさまにてとなむ思ひ給ふると宣へば、日ごろもカクナム宣へど、邪気などの人の心たぶろかして、かかるかたにて進むるやうも侍るなるをとて…（柏木 1239-2）

朱雀院は女三の宮から直接出家の望みを聞いて、「かくなむ進み宣ふを」と光源氏に伝えた。これは話し手にとってD-領域の情報である。それに答えて光源氏も、「日ごろもカクナム宣へど」と言っている。これは現代語の場合であれば、「もうずっとそうおっしゃっていますけれど」というように、I-領域を検索対象とするソ系の指示詞が現れるところである。

ただこの場合には、光源氏は女三の宮の夫として、彼女に出家の望みがあるということ、それも「日ごろも」そう言っているということを、朱雀院に聞かされるまでもなく知っていたわけである。そのため、光源氏にとってそれは朱雀院に聞かされて知った情報ではなく、D-領域の情報であるので、カク・ナムが現れていると考えれば、これまでの検討結果に反する例とはならないであろう。(注9)

n 13心解けてもいらへ給はず、いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは、かうながらこそ、朽ちも失せめとなむ思ひ侍るとのみ宣へば、げに、シカナ

ム思さるべけれど、生ける身を捨て、かくむくつけき住ひするたぐひは、侍らずやあらむ、大将殿の…（蓬生 530-1）

大弐となった夫とともに筑紫に下ることになった末摘花の叔母が、うわべはいかにも親切そうに末摘花に同行を勧める。誘いを断る末摘花の言葉を受けて、叔母は「げに、シカナム思さるべけれど…」と言う。これは「誘いを断る」という末摘花の意志について、それも分からぬではないと述べているものであるから、叔母にとってD-領域の情報であるとはみなしにくい。

ただ、この例について考慮すべきは、この叔母の人柄であろう。それについて蓬生巻の先行部では、親王に嫁した末摘花母と違って、彼女には受領層の妻に「落つべき宿世」があったためか、「心すこしなほなほしき御叔母にぞありける」（524-10）というように描かれていた。そのうえ、この叔母は末摘花に対して恨みに思う感情が先に立っていて、そもそも筑紫へ同行させようというのも、末摘花への意趣返しを目論んでのことである。自分の夫は大宰大弐となったのに対して、今目の前にいる末摘花は光源氏からも忘れられ、その生活は零落の極みのような有様である。この例に続く会話の内容を見ても、その末摘花に対して「生ける身を捨て、かくむくつけき住ひするたぐひは、侍らずやあらむ」など、無遠慮なずけずけとした物言いをしている。

このような、貴族社会に属する者に期待される思慮、配慮を欠いた人物を話し手とする会話に現れる例が、他の諸例に対する有効な反証となるとは考えにくい。この例だけが他の例と異なっているのは、むしろそこに何らかの人物造形的な意図―その意図の解明については今は措くとしても―があると見るべきであろう。

以上、〈指示副詞＋ナム〉の文脈指示の例においても、その文が伝達しているのは、原則として話し手にとってD-領域の情報であると考えてよいと思われる。

5-2

〈指示副詞＋コソ〉には、会話中に現れる文脈指示の例が13例ある。その内、指示対象が話し手自らの発言内にあるものが7例（カク・コソ2例、サ・コソ5例）、会話の相手の発言内にあるものが6例（サ・コソ6例）である。〈指示副詞＋ナム〉の例と比べると、それらの文で伝達されている情報が、必ずしも話し手にとってD-領域の情報ではないという違いがある。

k 6 胸はいつともなく、かくこそは侍れ、昔の人もサコソはものし給しか、長かるまじき人のするわざとか、人も言ひ侍めるとぞ宣ふ（宿木 1752-4）

k 7 かの院、なにごとも心及び給はぬことはおさおさなきうちにも、楽のかたのことは、御心とどめて、いとかしこく知りととのへ給へるを、サコソ思し捨てたるやうなれ、静かに聞こし召しすまさむ事、今しもなむ心遣ひせらるべき（若菜下 1215-9）

ｋ６の例は、指示対象が話し手（宇治中の君）自らの発言内にあるもので、「昔の人（宇治大君）もサコソはものし給しか」で伝達されているのは、話し手にとってD-領域の情報である。

対してｋ７の例の場合、「サコソ思し捨てたるやうなれ」のサは、柏木が朱雀院について「今はいよいよいとかすかなるさまに思しすまして」と言ったのを指している。そしてそのような柏木の見方を訂正するように、光源氏は、「静かに聞こし召しすまさむ事、今しもなむ心遣ひせらるべき」と言うのである。この場合、「サコソ思し捨てたるやうなれ」が、話し手の光源氏にとってD-領域の情報を伝達しているとは考えにくいだろう。

5-3

〈指示副詞＋ゾ〉の文脈指示の例で、会話中に現れるものは次の３例である。

ｚ５…まづこの院を出でおはしましねといふ、さて、これより人少ななる所はいかでかあらんと宣ふ、げに、サゾ侍らん、かの古里は女房などの悲しびに堪えず、泣きまどひ侍らんに、隣りしげく、とがむる里人多く侍らんに、をのづから聞こえ侍らんを…（夕顔 128-7）

ｚ６いと怖ろしう、いとおしと思して、后に聞こえさせ給ひければ、雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることは、サゾ侍る、軽々しきやうに思しおどろくまじきことと聞こえ給ふ（明石 461-7）

ｚ７…すくよかに言ひ出でたる事もしわざも、女しき所なかめるぞひとやうなめると宣へば、うつつの人も、サゾあるべかめる、人々しく立てたるおもむき異にて、よきほどにかまへぬや…（螢 819-13）

ｚ５の例では、「さて、これより人少ななる所はいかでかあらん」という光源氏の言葉に、惟光が「げに、サゾ侍らん…」と応じている。惟光としても光源氏の見方に同意しているわけであり、推量の助動詞ムも現れているのであるから、話し手のD-領域の情報とは考えられない。

ｚ６の例は、朱雀院の帝が自らの見た夢の内容を、母・弘徽殿大后に打ち明けてアドバイスを受けている場面に現れる。「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることは、サゾ侍る」は大后の言葉であるが、帝の夢は彼女にとっても予想外の出来事であったはずであり、この言葉も帝の告白を受けて、とっさに応じたものと解することが出来よう。そうであるならば、これはD-領域の情報を伝えているわけではないということになる。

ｚ７の例では物語の登場人物に対する紫の上の批評を受けて、光源氏が「うつつの人も、サゾあるべかめる」と応じている。これも、紫の上の批評に触発されての言葉であ

り、話し手にとってD-領域の情報だと考えるには無理があるだろう。

さらに心理描写中に現れている〈指示副詞＋ゾ〉の文脈指示の例を見ても、次に示すもののように、その文はD-領域ではなくI-領域の情報を伝えていると解されるのである。

z 8…など、あさはかにきこえなし給へば、
　　惜しからぬ命にかへて目のまへの別れをしばしとどめてしがな
げに、サゾ思さるらむと、いと見捨てがたけれど、明け果てなばはしたなかるべきにより、いそぎ出で給ひぬ（須磨413-1）

6

以上、会話省略表現、現場指示、文脈指示の三つの用法を通して検討した結果は、次のようにまとめられる。

- 〈指示副詞＋ナム〉が現れる文あるいは節においては、話し手にとって以前から知っている、直示可能なD-領域の情報が伝達されている。
- 〈指示副詞＋ゾ〉が現れる文あるいは節においては、話し手にとってD-領域の情報が伝達されている例は少なく、それが確実な例はない。
- 〈指示副詞＋コソ〉が現れる文あるいは節においては、話し手にとってD-領域の情報が伝達されている場合も、そうでない場合もある。

ここにおいて〈指示副詞＋ナム〉と〈指示副詞＋ゾ〉とはまったく対照的である。これが敷衍されるのであれば、係助詞ナムとゾとの違いは、それらが現れる文が伝えている情報がD-領域に属しているかいないかの違いだということになる。これらの係助詞は、文あるいは節が伝達する情報が属する談話領域の標識として働いていることになる。

そしてナムについて従来指摘されてきた、「会話部や消息中に多く現れ、登場人物の心理描写の中にはほとんど現れない」「ナムの結びになる助動詞には、〈推量の助動詞〉と呼ばれるものの例が、ゾ・コソに比べて少ない」といった分布上の特徴は、このような見方にむしろ符合するものだともいえよう。

しかし、小論は係助詞の用法のごく一部を取り上げて、その働きに一つの見通しを立てたにすぎない。今後さらに広汎かつ詳細な検討を加えることを課題としたい。

注1　源氏物語本文は『源氏物語大成』によるが、引用文には、小論の筆者の判断によって校訂を加えた部分、表記を改めた部分がある。

注2　検索には『源氏物語語彙用例総索引　自立語篇』（勉誠社）を利用し、また、古典総合研究所ホームページ（http://www.genji.co.jp/）の恩恵に与った。

注3　あるいは「物語の聞き手」ということも出来るだろうが、「会話の聞き手」との混乱を避けるために「読者」とする。

注4　現代語で会話省略表現がなされる時には、「これこれ」「こうこう」といったコ系列の指示詞が用いられる。田窪・金水（2000）はコ系列指示詞について明示的に述べていないが、定義から考えてア系列と同じくD-領域を検索領域としていると解してよいものと思う。

また古典文学作品を資料とした考察に談話管理理論を利用するに際して、小論ではこれら会話省略表現を含む会話文と、会話文に準ずるものと考えられる心理描写文に現れる例に、分析の対象を限定することにする。

注5　「かくなんと」とする本文もあるが、どちらにしても論旨に影響はない。

注6　「さぞかし」のような終助詞ゾの例は除いてある。次の例も終助詞ゾの例として除いてある。

○　若君の御ことを、サゾと思ひたりしも、げにかかるべき契りにてや、思ひのほかに心憂きこともありけむと思しよるに…（柏木 1249-6）

注7　係助詞の下接しない〈指示副詞〉の例については、包括的な調査はできていないが、たとえば次に示すように、会話省略表現に該当するものはいくつか見られる。

①…男どもをばとどめて、介にカウカウと言ひ合はせて、こなたに移し奉る（玉鬘 736-1）右近←→豊後介

②北方、御心地少し例になりて、世の中をあさましう思ひなげき給ふに、カクと聞こえ給へれば…（真木柱 949-11）式部卿宮→髭黒北の方

③乳母、車請ひて、常陸殿へ往ぬ、北の方にカウカウと言へば、胸つぶれ騒ぎて…（東屋 1834-1）浮舟乳母→浮舟母

このうち、②の例は〈打明〉、③の例は〈報告〉である。①の例では「言ひ合はせて」とあるので、話し手と聞き手とが相談を交わしていることになり、やや事情が異なるように見える。しかし、右近から豊後介に持ちかけた相談であり、主導権を持っていたのは右近の方であろうから、〈打明〉の例と見てよいと思われる。

注8　「…はぐくみ奉らせ給べくゾ侍めりし」と係助詞ゾも現れているが、このことについては今後ゾの検討のおりに考えたい。

注9　ただし、そのような場合であっても現代語ではソ系列の指示詞を用いるのが自然である。古典語と現代語とで、その点は異なるのだと考えざるをえない。

［参考文献］

岡崎友子（1999）「指示副詞の歴史的考察―「カク」を中心に―」『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式―落語資料を中心として―』（文部省科学研究費研究成果報告書）

田窪行則・金水　敏（2000）「複数の心的領域による談話管理」『認知言語学の発展』ひつじ書房

森野　崇（1987）「係助詞「なむ」の伝達性―『源氏物語』の用例から―」『国文学研究』第92集

（しばた　さとし　静岡英和女学院短期大学）